2019 年度　文理融合ジョイントリサーチ研修
オーストラリア・ニューサウスウェールズ大学
研修報告書

本研修報告書は、研修参加学生の提出した文章を、そのまま掲載したものです。
ただし、文中の用語に対して、京都大学国際戦略本部が脚注を挿入している箇所があります。

言語、文化、自然に触れた 3 週間

W.O.
文学部 1 回生

私がこのプログラムに参加した理由は二つある。一つは、英語力の向上だ。4 技能はもちろん、日常生活で使われる英語の表現や単語のニュアンスを学びたいと思っていた。もう一つは、オーストラリアの多文化性や自然の豊かさに魅力を感じたからだ。そんな私にとって、ホームステイをしながら語学学校に通い、またツアーでブルーマウンテンにも訪れることができるこのプログラムはぴったりだと思い、参加を決めた。授業の間は、グループでの話し合いで沈黙の時間がなるべく無いように、自分から話題を振ることや、メンバーに意見を訪ねてみることを心がけた。また、わからない単語はまず英英辞典を引くようにし、英語だけに触れる時間を多くとるようにした。

英語に関しては、授業とホームステイそれぞれから多くのことを学んだ。授業は、AI や Hapiness、Organ Donation など、普段議論する機会の少ないトピックについて英語で話す貴重な機会になった。ホームステイでは、私が目標としていた、英単語のニュアンスについての発見が多くあった。その一つが、beautiful という単語である。私は、この単語について景観に使うイメージしかもっていなかった。しかし、ホストマザーが、おいしそうな料理や、何かがうまくいった様子を TV で見ていたときにこの単語を使っているのを見て、beautiful という単語にはより広い意味があるのだと気付いた。また、表現することの大切さも学んだ。最初の頃は、ホストファミリーの話をしていても、うなずくことしかできなかった。しかし、授業の中で、「オーストラリアの人は、人の話を聞くとき、様々な種類の返しをする」というのを聞いた。その後、話を聞くときに、I see.や Wow! Surprising! 、Oh、I think so.など、違う返しをしてみた。すると、難しい言葉は全く使っていないのに、ホストファミリーは私の英語が上達したとほめてくれた。このことから、反応の仕方で話す人の印象は大きく変わることに気づいた。

オーストラリアの多文化性に関しては、Collaborative Research のアンケート調査の時に特に強く感じた。私たちは Australian students と International students の違いについて調査していたのだが、私は無意識に、Australian students=欧米の人というイメージを持ってしまっていた。しかし、例えばアジア人の学生でも、両親や祖父母の代からオーストラリアに移ってきた人は Australian students であると気付き、「オーストラリア人」について幅広くとらえられるようになった。

さらに、3 週間でオーストラリアの豊かな自然や生き物にたくさん触れることもできた。ブルーマウンテンはブッシュファイアの影響を心配していたが、一面に広がる森を見ることができ、雄大な自然を守っていきたいと思った。休日は予定を立ててビーチや動物園、水族館へ行った。平日でもビーチは人でいっぱいだったのに驚いたし、オーストラリア固有の生き物を間近で見ることができてよかった。

今回のプログラムを活かしていきたいと思う面は二つある。一つは、英語学習の面だ。研修で出会ったニューサウスウェールズ大学の学生は、プレゼンやディスカッションがとても上手だと感じた。そのため、リーディングやライティングはもちろん、英語を話す・聞くことを重視した授業を履修したいと思う。もう一つは、多文化についてのとらえ方の面だ。オーストラリアで多くの日本との違いを見つけたことで、自分自身を客観的に見る視点や、違いを受け入れる意識が強くなったと思う。今後も、自分が出会う様々な人に対して、このような意識

で接していきたい。

ありがとうオーストラリア

匿名希望
文学部 1 回生

私は今まで海外に行ったことがなく、大学在学中に英語圏の国に行ってみたいと思っていた、というのがこのプログラムに参加しようと思った理由の一つです。オーストラリアは治安が良く、日本からの時差も少なく、アジア系も含めて様々な人種の人がいて、初海外の私にやさしい渡航先だったと思います。また、大学主催であり、渡航準備から現地での活動まで困ったことがあれば助けてもらえるサポート体制が整っているきちんとしたプログラムだったため、安心して参加できました。

プログラムに参加したことによって、本物の英語に触れることができ、さらなる英語学習の大切さを実感しました。加えて、初めて異国を訪れるという経験から、異国の文化を理解し、外国の環境に適応していく力を少しだけですが身につけられたと思います。その一方で、慣れ親しんだ日本の文化や生活のありがたみを痛感し、その良さを再認識できたとも感じています。

大学在学中に海外経験を積みたいと考えているため、プログラムで得た経験を足掛かりに、将来はアメリカやフランスなどのいろいろな国に行ってみたいと考えています。また、現地で交流してくださった学生さんやホストファミリーの皆さんと今後も連絡を取り合い、その中の多くの方々は日本に関心を持ってくださっていたので、日本に来ていただいた時には感謝の気持ちを込めておもてなしできたらいいなと思っています。
正直なところ、それなりに値が張るうえに、海外研修とはどのようなものなのかもよく分からず、一人で申し込んで友達ができなかったらどうしよう、などととぎりぎりまで参加しようか迷いましたが、プログラムを終えた今では、思い切って今回のプログラムに参加を決めてよかったと思っています。

一緒に楽しい 3 週間をつくってくださった同行者の皆さん、温かく迎えてくださったホストファミリーや研修校の方々、そしてはじめての海外留学を応援してくれた家族に本当に感謝しています。

大それたことは小さなことから実現する

A.M.
法学部 1 回生

このプログラムに参加したのは、まず自分が長期休みを持て余してしまうという確信があったことが理由です。海外に今まで 1 度も行ったことがなく、またぼんやりとした留学への憧れを持っていたので、国際教育交流課を訪れ、このプログラムを紹介していただきました。

この留学で感じたのは、「出会う人は自分とは異なる文化や価値観を持っている」と自覚した上で相手を理解しようとすれば、相手と自分の間にある壁を越えることは容易なのかもしれない、ということです。私のホストファミリーは、ヴィーガンで、夕飯はサラダのみ、という日も多くありました。日本にいれば、夕飯がサラダだけということには耐えられないし、許せなかったと思います。しかし、ホストファミリーが自分と同じ価値観や生活習慣を持っているわけがなく、また、いまは自分もホストファミリーの一員なのだ、という自覚が、彼らと完全に食事を共にし、彼らの価値観を自分が共有しなくとも、理解し、尊重することを可能にしました。この感覚を、ホストファミリーという狭いコミュニティーから、国や世界と言った大きなコミュニティーに広げることができれば、私たちは、全く異なるバックグラウンドを持つ人々とわかりあい、尊重し合えるのではないでしょうか。そして、この感覚を、自分に近しい人にも持つことが必要だと感じたのです。例えば、日本人で、同じ大学、学部の同期に対して、私たちは無意識のうちに、自分が持っている基本的な価値観を共有していることを前提にしていることが往々にしてあります。しかし、人それぞれ育ってきた環境が違う以上、価値観を共有しているはずはなく、その前提は、時に相手を傷つけているでしょう。この感覚を持てば、私たちはずっと相手を理解・尊重できると思います。

この留学経験を、何かに挑戦する時に思い出し、原動力にしたいです。一人でお店に入って店員さんとコミュニケーションしたこと、クラスメイトと英語で討論したこと、現地の学生と話したこと、ホームステイ先でたくさん話し、笑ったこと、きっと忘れないと思います。あんなにたくさんのことができたのだから、今回も頑張れる、と自分を奮い立たせるつもりです。また、このプログラムに参加していた仲間たちとの交流を持ち続けたいと思います。

本研修を振り返って

匿名希望
法学部 2 回生

私がこのプログラムへの参加を決めた理由は第一に英語を話さなければならない環境下に自分を置いて英語力を向上させるため、第二に多文化で知られるオーストラリアという地を肌で感じたいと思ったためである。視野を広げるというと薄っぺらいが、日本という閉鎖的な空間から一歩外に出てみたいと思った。

第一の目的を果たせたかと聞かれると、必ずしもうなずくことはできない。1 日のうちのほとんどを学校で同じ京大生とともに過ごし、ホームステイ先でも日本人留学生との会話がほとんどを占めていた。観光や買い物も、単語レベルの英語やボディーランゲージで乗り切れる。英語なんてできなくても生活はできる、そう感じた。しかし、アカデミックな英語となると話は全く変わってくる。プレゼンの準備の際、現地留学生に自分の考えを正確に英語にして伝えられないことにもどかしさを感じた。この感情を拭うには、3 週間では足りなかった。

他方、オーストラリアの文化には存分に触れることができたと思う。オーストラリアは多文化であるというのは分かっていたが、様々な文化が共存し、互いが互いを尊重しあっている、そんな風に感じた。食文化を例にとっても、中華料理、インド料理、タイ料理、マレーシア料理、日本食、イタリアン、フレンチ･･･といった様々な料理が混ざり合うことなく並存しているのである。他国の文化を自国の文化に取り入れて独自の発展を図る日本も素晴らしいと思うが、これも一つの正解像だと感じた。

また、オーストラリアには日本にない時間の流れと自由を感じた。朝は早く家を出て、カフェでコーヒーをテイクアウトして職場に向かう人々。仕事を夕方には切り上げて、仲間とともにハッピーアワーを楽しむ人々。交通費がほとんどかからない休日に家族や友達と水族館や動物園、ビーチに繰り出す人々。全ての時間の流れがゆったりとしていた。街中やショッピングモールのビルの狭間、海辺ではストリートアーティストがクオリティーの高い演奏を披露したり、絵を描いていたりした。バスの中の過ごし方も自由そのものだった。電話をする人、何かを食べている人、読書をする人、音楽を聴く人。バスや電車に乗れば皆がうつむいてスマホの画面を眺めている日本との違いを感じた。これを国際理解と呼んでいいのかは分からないが、時間の使い方の違いは個人的にとても興味深かった。

このプログラムで得た経験は、将来どこに行ってもある程度生きていけるという自信につながったと思う。Wi-Fi ルーターが故障しても、ホームステイ先の食事が合わなくてもどうにかたくましく生きていけたという事実を、今後何らかの困難にぶつかった際、慌てず冷静に最適な対処を考える姿勢に変えていきたい。また、英語力不足を痛感したので、今後日本でも英語の習得に励み、将来仕事でも使いこなせるレベルに押し上げる原動力としたい。

英語ができることの魅力

中西 俊貴（Toshiki NAKANISHI）
法学部 2 回生

私がこのプログラムに参加しようと考えた理由は、大学生のうちに留学をしてみたい、英語が上手くなりたい、異文化を体験したいなど様々でした。しかしその中でも一番の理由は、ホームステイを経験してみたかったことです。私の母も学生時代にホームステイでの留学を経験しており、その魅力に加えて困難さを聞いたことで、してみたいと思いながら不安も感じていました。そこで、京都大学のプログラムなら授業も現地での生活も安心だろう、そしてこのプログラムでしか経験できないことがたくさんあるだろうと考え、応募を決めました。

最初はとても緊張していたホームステイも、ホストファミリーのおかげで過ごしやすいものになりました。夕食を一緒に食べるときにはホストマザーがその日のことを尋ねてくれました。夜に出歩くと言えば、近くで危険な場所を教えてくれました。電気をつけっぱなしにしているとホストファザーが叱ってくれました。学生を多く受け入れているところはビジネスの側面ももちろんありますが、それ以上に家族のあたたかみを感じる素敵な体験でした。

もちろんこの留学の魅力はホームステイだけではありません。授業はすべて英語で、オーストラリアならではのスラングも教えてくれました。日本語でも難しいような環境問題についての議論をすることもありました。授業以外の時間の使い方は個人に大きく委ねられます。私は現地に友達を作りたいと思い、大学の日豪交流サークルに参加しました。駅前で日本好きの学生に話しかけたこともありました。現地の学生はみんな親切で、誰とでも仲良くなれるような印象を受けました。オペラハウスでの英語字幕のついたオペラや、美術館での日本文化を取り上げた特別展、そして LGBTQI のためのパレードなど多種多様な文化のあり方にも触れることができました。

私がこのプログラムを通して強く感じたことは、英語学習は人生を豊かにするためのものであるということです。英語を学ぶ理由は受験あるいはビジネスのためであったり、単にカッコいいからであったり様々でしょう。しかしそれ以上に、外国の人々とやりとりすることや英語で書かれた文書や看板を眺めることを通して異文化を知り、自分の見識や視野を広げられることが、英語ができることの一番の魅力だと思います。正直なところ、シドニーは英語があまりできなくてもなんとかなる街で、英語を使う時間より日本語で友達と会話する時間の方が長い日すらあったかもしれません。それでも、お店で頼んだ料理が思っていたものと違ったときほど、英語が読めない自分を恨む場面はありません。そして、ホストマザーの現地ならではの話やホストファザーのジョークがあまり理解できなかったとき、現地学生が英語で楽しそうに会話しているときなど、英語がもっと聞き取れて話せたらどんなに楽しいだろうと思うような場面がたくさんありました。受験は英語が読めて書ければなんとかなる気がしますが、現地の人々はなんでも文字に起こしてくれるわけではありません。きっと SNS での文章よりも会話の方が面白い話をしてくれるはずです。だからこそ、この貴重な経験をバネにもっと英語を勉強し、自分の視野を世界へと広げていきたいと思います。

JAPAN
SUPERNATURAL

NIPPON
STUDENTS'
ASSOCIATION

英語で話すということ

青柳 智也（Tomoya AOYAGI）
経済学部 2 回生

私は大学に入る以前から漠然と海外で生活をしてみたいという気持ちを抱いてきた。しかし、これまでに海外に行った経験が多いわけでもなく、いきなり半年以上の長期留学に挑戦し、専門的なことを学ぶには自身の語学力に課題があると感じたため、今回の短期留学に参加し、日本語に頼ることができない環境に身を置くことで現段階での自身の英語能力がどれほどであるか確認し、今後の語学力向上における課題を見つけたいと思った。加えて、単なる旅行では体験することができない、生活レベルでのオーストラリア文化、異文化を学ぶ機会であるという点にも魅力を感じ、このプログラムに参加した。

ありきたりな表現であるが、この 3 週間は濃密なものであり、一瞬で過ぎ去ってしまった。授業では文法や語彙、リスニングも大切であったが、それ以上にスピーキングが重視されており、対話が中心の展開であった。また、共同研究では現地学生にインタビューをするなど、英語でコミュニケーションをとる機会が多かった。その中で特に感じたことは、英語を話すことをためらっていては上達するわけがなく、片言ながらにも会話や発言をすることで、自分の考えを英語で伝える力が養われるということだ。自分の意見を瞬時に英語にすることは未だに難しく感じるが、英語を話すことへのためらいがなくなったことは私にとって大きな収穫であった。

ホストファミリーとの生活からも学ぶことが多くあった。ホストファザーがインドネシア出身ということもあり、食事や装飾でインドネシア文化までも体感することができた。そういった文化の違いや一日の出来事についてホストファミリーと話す時間では、自分の感想も含めて話すように努めたことで、そこから新たな話題に発展することもあり、とても貴重な時間であったと思う。

シドニーは総じて住みやすい街であった。都会であるのに街中には公園や植物園など緑があふれており、少し都心を離れるとブルーマウンテンなどの雄大な自然がある。人と自然がうまく共存している街であると感じた。公共交通機関も発達しており、授業後や休日に様々な場所を訪れ、現地ならではの体験ができたことも良い思い出となった。

このプログラムから多くのものを得ることができた。何かに挑戦する気持ち、積極性を持つことが自分の成長に大切であると感じた。ただ楽しかったというだけで終わらせてはこの留学の意味が半減してしまうと思うので、以降も継続して英語に触れていきたいと思う。

現地で交通カードを無くした先に得たもの

Y.T.
経済学部 2 回生

1、　派遣開始前

2019 年 10 月に IELTS を受験し、その時のスピーキングの得点のあまりの悪さに短期留学を決意しました。この時期を選んだ理由としては二つあります。一つ目は IELTS の結果が出た時期頃に申し込める留学プログラムが春の時期だったから。二つ目は現在体育会に所属していて、休める時期が春くらいだったから、です。他のプログラムはあまり検討していませんでした。理由は特にありません

参加前の準備としては、簡単な瞬間英会話の本を見たりしていました。Would　you…や Can I… 程度は使えるようにはしておいた方がいいと思います。あとは、ホストファミリーへのお土産について、どんなものでも喜んでくれると思いますがオーストラリアのお菓子は非常に甘いので、少し甘さ控えめの上品なお菓子の方が受けが良いように感じました。

2、　派遣期間中

大学の設備は素晴らしかったです。文句の言いようがなかったのでこれが全てです。

ホストの家から大学までは一時間ほどかかりました。北に住んでいたので毎日オペラハウスを見ながらハーバーブリッジを通って通学する、シドニー満喫ツアーを毎日楽しんでいました。食事については、印象に残っているのは三つでカンガルー、T ボーンステーキ、現地の学生と食べに行った韓国風焼肉です。どれも非常に美味しくいい思い出です。プログラム以外に取り組んだものとしては、困った時は現地の人に話しかけて助けを求めることを意識しておこないました。強制的に英語で話さないといけないし、困っているので理解しないといけない。とてもよい経験です。週末は大学の友達とビーチに行ったり、フィッシュマーケットに行ったり、オペラを観に行ったりしていました。オーストラリアの日差しはとても強く、私たちの肌はとてもダメージを受けてしまいました。Sim カードを日本で購入しましたが、オーストラリアでも購入する時間があるのでそちらの方がよかったかなと思います。

留学費用について、かなりかかります。
食費　一日 15-20 ドル
交通費　130 ドル程度
娯楽費　人によります。　500 くらい？　合計　1000 ドルくらいでした。

3、　派遣終了後

今回の留学を通じてこれからの人生の目標が二つ追加されました。一つ目は海外の大学で学ぶこと。もう来年から三回生なので自分が大学生の間にこれを達成することは少し難しいように感じます。しかし、社費留学や私費留学など学ぶ選択肢はいくらでもあるので達成できない目標ではないでしょう。二つ目は海外の人ともっと関わりを持って色々な考え方を学ぶこと、です。国によって考えは違います。しかし悪い考えをする国はありません。友達いっぱい作りたいと思います。

ピーリングファミリー

中野 友太（Yuta NAKANO）
経済学部 2 回生

私は、昔から海外での生活にあこがれており、常々留学したいという思いを持っていました。しかしながら、なかなか半年間や一年間という長期間での留学への参加を決断することができず、結局留学することを半ば断念していました。そんな中、昨年の年末に偶然、京都大学の HP で 3 週間という短期間で気軽に参加できる本プログラムを見つけ、この機会を逃せば二度と留学することはないと思い、参加することを決めました。

留学中の学習面においては、スピーキング能力の向上を目標に掲げました。ところが、大学での授業が始まっても、最初のうちは授業中しか英語を話しておらず、本当にスピーキングできるようになるのかと疑問に思っていました。そこで、同じような懸念を持っていたグループのメンバー2 人と一緒に授業外であっても日本語を話す事を禁止にするという約束をしました。それからはスラスラと話したい内容が英語で浮かんでくるようになり、3 人で中華街に行ったときには、無意識にずっと英語で会話していました。

その成果として、最初のうちは理解することができなかったホストマザーのジョークも理解できるようになり、上手に返して笑ってもらうことができるレベルまでに成長しました。また、英語を話すことへの抵抗もなくなり、現地の学生との会話も大幅に増え、バスやライトレールで隣に座った知らない人からも話しかけられた際には、どちらかが降車するまで会話が続くようになりました。

このプログラムを通じて、成長するためには自ら積極的に行動することが必要だということを理解しました。これから何か目標を設定し、努力していく際には、自分のおかれた環境に甘んじるのではなく、自ら成長に適した環境へと変えていこうと思いました。

CIEE の方を含め、留学に際してお世話になった方々、また一緒に授業を受けた友達、友達の中でも特に、題名にもなっているサーフィンで一緒に日焼けをして皮むき（ピーリング）しあったファミリーに御礼を言いたいと思います。ありがとうございました。
このプログラムに参加しようと思う方は必ず日焼け止めを塗ってください。

（日焼けで全身やけど状態）

短期プログラムを終えて

匿名希望
経済学部２回生

私が今回ニューサウスウェールズ大学の文理融合ジョイントリサーチプログラムに応募した目的は、同じく２０２０年の夏からオーストラリア国立大学に１年間交換留学をする予定であったため、それまでにオーストラリアの大学で実際に学ぶことで現地の文化や空気感を実感し、また大学で学ぶ上で自分に足りないものを把握したいというものでした。私はこの３週間のプログラムを通して当初の目的は十分に達成されたと考えています。

まず文化と空気感については、オーストラリア自体が多文化主義国家を標榜しているだけあって、街中には様々な国の飲食店があり、スーパーにも日本語をはじめとして多様な言語で書かれた食品が並んでいました。また、私が訪れた時期はコロナの流行が始まっており、ニュースなどでは特に欧州での黄色人種への差別が取り沙汰されているような状況でしたが、今回のプログラム中は一度もあからさまな差別を受けることはありませんでした。このように、オーストラリアは比較的文化の融合が進んでいるように感じられましたが、街中、大学構内で有色人種と白人の混ざったグループを見ることが想像していたよりもはるかに少なかったことは驚きでした。

次に自分に不足していると感じたことは、主にパソコンを扱うスキルと、純粋な英語力の二つでした。前者に関しては、プログラム中に、実際の大学の講義を聴講する機会があったのですが、その時に多くの学生がノートパソコンでノートをとっており、紙媒体にノートをとっている学生がほとんどいなかったということ、そしてメンターの学生の方から、オーストラリアの大学では授業数が少ない分、毎週のようにレポートの提出があるという話を聞いたことで、ブラインドタッチもできないような今の状態ではまともに授業を受けることができないということがわかりました。また、英語力に関しては、このプログラムを通して常に能力の不足を実感しており、リーディング・リスニング・ライティング・スピーキングすべての能力を向上させる必要があることを痛感しました。

今回のプログラムを通して私は、日本では絶対に経験できないような貴重な体験をすることができました。この経験を生かして、１年間の交換留学までの期間、できる限りの準備をしていきたいと考えています。

3 週間で体感したこと

F.N.
医学部 1 回生

私はこの春、3 週間ほどシドニーへ短期留学に行った。この留学の目的は、自信を持って英語でコミュニケーションをとれるようになることと、オーストラリアの多文化社会を体感することであった。私は以前から英語で会話することに苦手意識があり、それを恥ずかしく感じていたので、大学でその苦手意識を克服し、英語を楽しく話せるようになりたかった。そこで実際に英語を使って生活し、自分の英語がどれほど通用するのかを確かめるとともにいろんな日常的な表現を学ぼう、とこの春の留学を思い立った。また、オーストラリアの多文化社会に魅力を感じ、実際にそれを実感したいと思った。そこでとりあえず行ってみよう、とこの UNSW のプログラムに参加することにした。

実際にこの UNSW のプログラムに参加してみて、まず、私はただ英会話が苦手なのではなく、リスニングには少し長けているものの、スピーキングが全くできないことがわかった。会話をしていて、相手の言っていることはわかるのに自分の思いをすぐに言葉にできず、うまく言葉のキャッチボールができていなかった。3 週間の訓練で、相槌や言葉のつなぎ方を覚え、話している時の間を少し埋めることができるよう成長した。

また、オーストラリアの多文化性は予想以上であった。UNSW のキャンパスで、ヨーロッパ系の顔つきの人やアジア系、アフリカ系の見た目をした人に、留学生だと思って話しかけてみても、ほぼ全員が地元の学生だというので驚いた。オーストラリアでは当たり前のようにいろんな容貌のひとが一緒になって住んでいるので、特にどの民族が目立つ、といったこともなく、みんな同じように生活をしていて、いろんな違いを当たり前のように受け入れる傾向があると感じた。この留学期間中に行われていた LGBT の祭典マルディグラ[1]パレードでは、たくさんの LGBT の人が自らパレードに参加していて、何十万人という人々が彼らとともに歌い踊り叫んでいた。私はこの 3 週間のシドニーの滞在を通して、「ひとりひとりが違うのは当たり前」という当たり前の事実を体感することになり、それが強く私の胸に残っている。

このプログラムに参加したことで、自分の英会話能力の弱点を見つけ、それを少し改善することができた上、自分も世界に住む色んな人々のうちのひとりなのだなと感じた。また、言語能力とちょっとの勇気さえあれば、国外でも堂々と働いて暮らすことができ、そうして自分の将来を自分で好きなように決めることができると気づいた。またそうすることのできる決断力と行動力も、今回の短期留学を通して身についたのではないかと思う。

[1] マルディ・グラはフランス語で「肥沃な火曜日」の意で、謝肉祭の最終日に、派手なカーニバル（謝肉祭）を行うカトリック由来の年中行事。

充実の 3 週間

匿名希望
医学部 1 回生

このプログラムは大学での授業、ホームステイ、観光、その他日常生活の全てにおいて非常に得るものが多かった。自分は英語に限らず話すのが苦手で、討論などで発言することは滅多になかったし、人前で発表するようなシチュエーションは今までできるだけ避けてきた。だがこのままでは良くないと思い、どうしても発言しなければならない状況に身を置いてみようと考えて、このプログラムに応募した。

まず授業ではオーストラリアの文化、最先端の科学技術、社会問題など、様々な分野について学び、議論を交わすことができた。授業中はただ講義を聞くのとは違って自分の意見を言う機会が多く、自分の性格上ディスカッションの際に何を話していいかわからず口ごもってしまうことも多々あった。だがそんな時も先生や同じグループのメンバーたちが質問を投げかけてくれたり話題を振ってくれたりして助けてくれた。このように発言する機会が非常に多かったが、自分がそれを苦痛に感じてはいないことに気がついた。ディスカッション中は講義を聞くより圧倒的に集中力が必要だったので疲れてしまうことはあったが、終わった時になんとか乗り越えた、ではなく楽しかった、と思えた。これは自分の中で大きな成長だと思う。

オーストラリアの一般家庭にホームステイしたことも良い経験になった。私は中学生の頃に 2 週間ほど海外でホームステイした経験があるが、その時は専ら日本人の友達と話しており、ホストファミリーとほとんど会話ができなかった。この後悔があったので、今回のホームステイではホストファミリーとできるだけ会話しようと心に決めていた。今回は毎日夕食を共にしたり一緒にテレビを観たりする中で、英語でたくさん会話することができたと思う。また、時々孫が遊びにきて折り紙を教えてあげたり、習っているダンスを見せてもらったりなど楽しい時間をすごすことができた。だがそれと同時に、会話する中で自分が自由に使える語彙が大変少ないことにも気がついた。受験期に多くの英単語を覚えたのである程度のことは話せると思い込んでいたが、単語を知っていて英文の中で出て来れば意味を理解できることと、実際の会話ですらすらと使いこなせることは全く違うということを痛感した。このギャップを埋めるために今後も話す練習を継続していきたい。

また、週末や放課後には同じプログラムに参加している友人たちとビーチに行ったり食事をしたりと、シドニーをめいいっぱい満喫できた。シャワーを五分で済ませないといけなかったり、バスには一切アナウンスが無かったりなど日本での普段の生活と違っていて大変だった点も多かったが、これらも文化の違いと捉えて楽しむことができた。

コロナウイルスが広がる中ほとんど差し支え無く研修を終えられたのは本当に幸運だったと思う。このプログラムに関わってくださった全ての方に感謝したい。

オージー留学

北野 新悟（Shingo KITANO）
工学部 1 回生

このプログラムについて一回生の夏前に知りました。本当は、夏のプログラムに参加したかったのですが、知り始めるのが遅すぎたので春にあるこのプログラムに参加することになりました。そこでなぜ短期留学に参加しようと思ったかは様々な事情が重なったからです。まず、自分の夢に少しでも近づくためでした。私にはパイロットになるという夢があり、パイロットは英語を喋れる必要があります。そこで少しでも英語力を向上させようと思い留学しようと思うようになりました。しかし、半年や一年の留学となると京都大学の勉強に遅れをとってしまうし、私は浪人もしていたので長期休暇で行ける短期留学を選びました。このような経緯を経てこのニューサウスウェールズ大学短期留学に参加しました。

現地の学校ではもちろん英語の勉強をしていたのですが、ただ英語の勉強をするだけではありませんでした。例えば、再生可能エネルギーやサイボーグテクノロジーなどを通して、四技能やディスカッションを学びました。再生可能エネルギーについては色考えたことがあったのですが、サイボーグに関しては初めて深く考えたので新鮮でした。世界で問題とされているこれらについて改めて考えさせられることとなりました。また普段の生活を通してオーストラリアについていろんなことを感じました。特に思うのはオーストラリアの人は感謝の言葉をたくさんいうことです。レジで何か買ったあとやバスから降りるときなど、ほとんどの人が言っているのを見てすごく感心したのを覚えています。日本も礼儀で有名だけどよっぽどオーストラリアの人の方が礼儀がしっかりなっているのではないかなと感じました。こういうところを含めてオーストラリアを好きになりましたし、国際社会やオーストラリアについて理解が深まりました。

このプログラムを通していろんなことを経験して、よりパイロットになりたいという思いが強くなりました。またもっと国際社会について知らないといけないし、興味を持たなければいけないという気持ちも持つようになりました。もっと多くの国々の人と関わりたいし、もっと多くの国々に訪れたいからです。そのお仕事を通して国際社会について理解を深めたいし、そのためにはまだまだ英語力を上げないといけないし勉強をつづけないといけないと思いました。これからの人生にこの留学の経験を生かしていきたいと思います。

「自分」を見つめ直した 3 週間

匿名希望
工学部 1 回生

幼い頃から海外に憧れがあり、できるだけ若いうちに留学したいと考えていました。しかし、高校生の時は、部活や勉強のため充分な時間が取れず、短期のものですら留学をあきらめざるを得ませんでした。そのため、大学に入学したら少なくとも一回は必ず留学したいとずっと考えていました。

私は工学部地球工学科に所属しており、将来は世界にまで視野を広げて、まちづくり・都市計画・景観設計に携わりたいと考えています。そんな時、留学情報を探し求めてやってきた留学生ラウンジきずなでこのニューサウスウェールズ文理融合リサーチプロジェクトの紹介資料を見つけました。昔から美しくて治安もいい街が多数存在するオーストラリアに興味があった上、英語の能力も今よりもさらに向上させたいと考えていた私は、このプロジェクトの存在を知るや否や、家族に行きたい旨を伝えました。両親は非常に協力的で、全面的にバックアップしてくれました。そのような周りの支えもあり、オーストラリアへの留学が決まった時の嬉しさは今でも鮮明に覚えています。そして、留学前は洋楽を聞くでもなんでも、何かしら毎日英語に触れるよう努めました。留学前に何度も行われたオリエンテーションでは、滞在中の注意事項やリスク管理など、実際の滞在について詳しく説明していただいたので、安心感が高まりました。そして出発当日、3 週間も親元を離れること自体初めてのことであった上、英語しか使えない環境で生活するということも初体験だったので、正直不安だらけでした。しかし、シドニー到着後、ホストファミリーと面会した瞬間に、そのような不安も吹き飛びました。ホストマザーは本当に優しく、わたしの拙い英語も必死に理解しようとしてくれました。また、私のホストマザーは私の他にも、ドイツ人の留学生とベトナム人の留学生を迎え入れており、家ではいつも誰かしら話し相手がいる状況でした。私以外の 2 人は私よりもずっとリスニング、スピーキングともに英語の能力に長けており、そこでまず刺激を受けました。同じ年代の学生なのに、どうしてこうも外国語の運営能力が違うのだろうかと、自分が非常に情けなくなることも多々ありました。しかし、2 人の留学生もホストマザーも、積極的に私とコミュニケーションを取ろうとしてくれたし、一緒にご飯を食べたりお出かけしたりしてくれたため、3 週間を終える頃にはかなりリスニング能力が高まりました。

次に、UNSW global での経験についてです。クラスでは英語しか使ってはならず、日本語でも表現することが難しい内容を、相手に伝えるために英語にすることは本当に難しくて複雑で、この 3 週間を通してかなり英語のスピーキング力が高まったような気がします。普段のライティングやリスニングの授業では、オーストラリアの文化や最先端技術についてなど、非常にためになる内容ばかりでした。また授業聴講では、現地の大学生の学習意欲の高さに刺激を受けました。飛び交う質問や教授との会話など、日本ではあまり見受けられない光景がそこにはあるりました。そして、グループで行ったリサーチでは、現地の大学生の協力度の高さに感激しました。簡単なアンケートとはいえ、日本人なら断りがちな調査にほぼ全員が協力してくれたことに感銘を受けました。そのおかげで、最終日のプレゼン発表では、短期間で仕上げたとは思い難い内容を発表することができ、非常に嬉しかったです。

また、大学や家以外でも、たくさんの気づきがありました。たとえば、街の景観について。私が将来携わりたいと考えている景観設計を強く意識した美しい街並みや訪問者の興味を強く惹きつけるような楽しい空間をたくさん目にしました。他にも、レストランやカフェにおける従業員の態度。もちろんお店によって異なるし、一

概にはいえませんが、全体的にオーストラリアの人々は、自分の仕事に誇りを持っているというように思われました。生き生きした笑顔や接客態度が非常に印象的でした。

この 3 週間は今までの人生の中でもかなりトップレベルで濃い時間でした。英語はもちろん、他にもこの 3 週間で学んだことを忘れずに、今後も自分の夢に向かって学習を続けていきたいと思います

真の自分と向き合える時間

匿名希望
工学部 1 回生

私がこの語学研修プログラムに参加しようと決めた理由として、もちろん語学力向上も大いに挙げられるが、それよりも重要なものとして、異文化に触れ、どれだけ自分の力で生活し、学習することができるのか、現状を試してみたいという考えもあった。そのような、何か新しいものに挑戦したいという漠然とした想いからこの企画に参加することを決めた。

現地の研修校での授業は、日本とは雰囲気が大きく異なり、オンライン教材を多く用いた、視覚、聴覚に訴えかけるものが多く、楽しみながら学習を進めることが出来た。それとともに、今後個人で進める英語学習の参考になる内容でもあった。

このプログラムを通して、どんなに異なるバックグラウンドを持つ人々とも、努力をすれば、必ず分かり合うことが出来るということを体験出来た。それと同時に、我々の考え方や振舞いは、気づかぬうちに、自国の価値観に大きく左右されているのだということを改めて実感できた。日本語だけで生活していくことは容易で不自由な点はほとんどないが、それだけだと異なる価値観を持つ、多種多様な人々と意見を交換することができない。英語は必須ではない。しかし、それを習得することで自分の可能性を大きく広げることが出来ると思う。今回の研修の醍醐味は、このような、頭では理解しているが実際はどうか分からないことを、身をもって体験出来る所にあるのだと感じた。

何よりも有意義に感じたのは、日本で過ごしている時よりも自分と向き合う時間が増えたこと。それによって、日本では苦手だった、自分の意見を持ち、それを相手に伝えることの大切さや自分は人と関わることが好きなのだということを再認識出来たことだった。

私は将来、化学系の仕事に従事し、グローバルな問題に取り組みたいと考えているので、この研修で培った英語力や、学んだ他文化理解の重要性は、将来の仕事に役立つと考える。
研修を終えて、より長期の語学留学に参加したいという思いがさらに強まった。一度自分の故郷から離れ、自分の力を試してみることで、今の自分に何が出来て、何が足りないのかを把握することができ、自信にもつながると考える。

私のシドニーでの貴重な経験を支えて下さった、国際教育交流課や CIEE の職員の皆様、ホストファミリー、ニューサウスウェールズ大学の先生方やメンターの方々、最高のクラスメイトに心から感謝したいと思う。
留学に少しでも興味のある方には、ただの語学研修として捉えるのではなく、自分と真摯に向き合える貴重な時間としても、こういった異国の地での研修に参加されることを強く勧めたいと思う。

多民族・多文化

匿名希望
工学部 2 回生

私がニューサウスウェールズ大学の研修に参加することを決めた理由は大きく三つあります。まず一つ目は、自分の興味のある内容で今の自分の能力にあった英語を学びたいとおもったからです。今年度の夏休みを利用して、アメリカの語学学校に 3 週間、個人で通いました。学力別のクラスでしたが、授業内容にあまり関心を持てず、語学力が向上したという実感は得られませんでした。このプログラムでは京大生のための授業をうけられるので、興味のある内容で楽しく学べるとおもいました。二つ目はホームステイをしたかったからです。ホームステイをすることで、現地の文化を体験したり、日常生活で英語を使う練習ができたりするので、一度ホームステイはしたいと思っていました。そして三つ目の理由は、大学が主催のプログラムなので、細かい手続きを自分でする必要がなく、研修先も信用できるからです。

短期でしたが、シドニーに留学して、日本との違いをかなり感じました。気候や食文化はもちろんですが、最も大きな違いを感じたのは民族についてです。近年では多民族化がすすんでいるとはいえ、日本はまだまだ単一民族国家です。一方、シドニーは本当にいろいろな国の人がすんでいて、多民族国家だということを肌で感じることができました。そして、それぞれの民族が互いに尊重しあって、それぞれの文化がまざりあって、シドニーという町ができているということを実感しました。私のホストマザーはイタリア人でした。最寄り駅の近くにはかなりの数の中華系の飲食店がありました。また、交流した現地の学生は日本、中国、ベトナム、インドネシアなどいろいろな国の方がいました。たった三週間の滞在でもこれほどいろいろな国の人と関わる機会があったので、実際はもっと多くの民族の方が住んでいるのだろうと思います。そして、互いに尊重し、認め合うことの大切さも学びました。

私は将来、英語を使う仕事をしたいので、英語を勉強しています。特に環境問題に関係する仕事をしたいです。環境問題の解決には世界規模での理解と協力が不可欠です。しかし、世界には様々な文化や宗教やあるので、環境問題に関する考え方は地域によって異なります。先進国や新興国という違いによっても考え方は異なってくるとおもいます。このような状況でも、今回の研修で学んだことを活かしてそれぞれの地域にあった解決策を考えたり、文化を活かして環境に優しい生活を送る工夫を考えたりしたいです。

日本とオーストラリアの違い

R.N.
工学部３回生

まず、自分がこのプログラムに参加するにあたって最も重要としていたことは、多言語での生活を通して様々な経験をするということである。自分は海外での留学というのは初めてで、この留学を通して現地での生活を肌で感じてみたいと思っていた。ホームステイ先に他の日本人学生はいなかったし、基本的に全てが英語という環境下で生活して、自分の英語力の不足から苦労することも多くあったが、日本とオーストラリアでの生活について違いを感じることができた。実際にホームステイが始まって第一に感じたのは、生活習慣の違いである。オーストラリアでは、ほとんどの店が午後５時には閉まってしまう。そのためか、ホストファミリーは午後９時には寝るなど早寝早起きがあたりまえのようであった。最初は不便に感じていたが、単に生活習慣が改善されるだけでなく、その分ファミリーとのコミュニケーションを大切にするようになるなど、順応することができてよかった。また、毎週木曜日はショッピングデーとして営業時間を延ばしたりオパールカード一枚ですべての公共交通機関が乗れたりと、都市としての管理がしっかりとしているということも感じた。水不足に対する国民の意識もそのうちの一つであると考えられる。家庭では湯船は使わず短時間のシャワーのみであるのはもちろん、洗濯や食器洗いは一度にまとめてするなど問題に対する努力がうかがえた。そのほかに、自分が最も体感したのは紫外線の強さである。これは学習面や文化理解とは少し離れるが、海で数時間陽に当たっていただけでものすごい日焼けをして、回復までに２週間ほど要してしまったのも思い出の一つである。来年度以降の参加者にはぜひ日焼け止め対策をお勧めしたい。これらのように日本での生活との違いがあるのは当たり前であり、事前に調べたり聞いたりしていたこともあったが、やはり実際に生活してみて初めて気付くことができるものも多くあった。

英語の学習面では大きく成長できたわけではないが、一つ言えることは、英語でのコミュニケーションに対する抵抗がなくなったということである。これについては何が変化したのか自分でもよくわかっていないが、英語での生活の中で慣れていったのだと思う。コミュニケーションを多く取ってくれたホストファミリーや先生方に感謝したい。そして、これからに日本の生活で無駄にしてしまわないように多くの英語に関わっていきたい。

自分は工学部で、これから先英語の文献を読んだり英語でプレゼンをしたりという場面が増えてくるし、将来仕事に就くにあたって世界視野で考えなければならないことも多々あると考えられる。そのような場面で今回得た経験を少しでも活かせたらと思う。

オーストラリアでできた学び

A.Y.
農学部 1 回生

この短期留学プログラムでは、日本ではできない経験を期待して向かい、その期待通りの体験を味わうことができた。その体験を振り返りつつこの学びを今後の人生でどのように活かすことができるか考えた。

そもそも、このプログラムを見つける前は長期留学をしようと考えていた。しかし、長期の海外での一人暮らしが怖く踏ん切りが付かず、それならいっそのこと短期留学に方向転換すれば良いのではないかと思い至った。そこで、生協仲介などの短期留学プログラムも視野に入れて短期留学を検討していたが、金銭的問題と信頼性の観点から大学主催のプログラムの方が良いのではないかと考えた。さらに、このプログラムでは、留学先の大学生との文理の垣根を超えたコラボレートリサーチができると聞き、グループワークを介したプレゼン発表は今後の自身の研究発表やグループワークに活かせるのではないかと考えたためこのプログラムの参加を決めた。

今回の短期留学ではプレゼン発表が主な目的ではあったが、それ以外にも学ぶことがたくさんあった。例えば、英語の学習面では言えばリスニング力が高まったと感じる。これは、授業だけではなく日常生活も英語の環境にいるので自然と色々な人の発音を聞くことができたことが大きいと考える。この経験によって、大体の人の話す英語が聞き取れるようになったと感じた。また、スピーキング力も向上したと感じる。授業でどのようなことに自分が注意しないといけないのか教わるので意識すべき点が明確化することもできた。また、たくさんの会話を通じて次の単語を引き出す速度が少し上がったように感じた。

また、オーストラリアでは多民族が入り混じった環境においてそれぞれが調和して生活していた。これは自分に異文化が一つの土地に集まりお互いに尊重し合うことができるのかという問いを問いかけてくるものだと感じた。もちろんオーストラリアは日本とかなり異なった環境だったと感じる。例えば、ホームステイ先の周りもホームステイに対して好意的であった。これは、生活に色々な人が入っていることをプラスに捉える環境が形成されているからではないかと考えた。

今回の経験によって海外に目を向ける大切さを知り、また海外で学びたいという意欲が掻き立てられた。英語力は海外留学や海外の大学院進学を目指す自分にとっては必要な力であると再認識されられた。その向上を目指すためにこれからも精進しなければならない。

また、観光都市京都に住んでいる以上、他国からの観光客が大勢いる。彼らの文化ではどのように振る舞うのか、また日本ではどのように振る舞わなければならないのか、その仲介役（架け橋）となれたら今回の経験を活かせることになるのではないだろうか。

貴重な三週間

匿名希望
農学部 2 回生

このプログラムに参加した理由の一つは、いつか留学して海外の学生生活を体験したり、ホームステイしたりしてみたいと中学生のころから思っていたからである。大学生になって自由な時間が増えたので留学のプログラムを探していたところ、このプログラムを見つけた。UNSW に 3 週間通うことができるほか、ホームステイも体験できることから、私にぴったりだった。初めての留学ということもあり不安も大きかったが、大学が主催する研修だったため少し安心して参加できた。もう一つの理由は、スピーキング力を向上させたかったからである。これまでの大学の講義で留学生とグループワークをする機会があったが、うまく自分の意見を伝えられず周りに頼ることが多かった。留学中は他人や辞書などに頼らずできるだけ自分の英語で会話して、コミュニケーション能力を高めることを目標とした。

オーストラリアに留学して、さまざまな人種の人々が互いに尊重しながら生活していることを実感した。日本とは違った文化や考え方に触れることが多くて毎日が新鮮だった。例えば、オーストラリアの公共交通機関は日本ほど正確に動いているわけではなくて何回か遅刻しそうになったが、それを現地の人はいつものこととして受け入れていたことに驚いた。大学の食堂には、日本料理も含めて様々な国の料理が並んでいて魅力的だった。ブルーマウンテンへの遠足も忘れられない思い出である。日本では見られないような大自然に感動した。実際に現地で生活しなければ得られない経験がたくさんあったので貴重な三週間だった。毎時間グループディスカッションがある UNSW での語学授業のおかげで、身振り手振りを交えながらなんとか自分の意見を伝えられるようになった。また、家に帰ってからはホストマザーとその日の出来事や最近のニュース、趣味などいろいろな話をすることで日常会話も学ぶことができた。そのほかにも、スーパーマーケットや飲食店で自分の英語がちゃんと相手に伝わったことは、自信につながった。

短期留学はあっという間だった。留学する前には考えていなかったが、今度は長期で留学に行ってみたい、将来海外で仕事をしてみたいと思うようになって、自分の視野が広がったように感じる。この三週間の経験を今後の人生に生かせるよう努力していきたい。

3 週間のシドニー生活

匿名希望
農学部 2 回生

私は 2/22 から 3/15 の 3 週間、シドニーに滞在し現地の語学学校に通った。3 週間はあっという間に過ぎてしまったが、とても有意義なものとなった。

私がこのプログラムに参加した理由は、英語力の向上のためである。大学生になって海外旅行に行く機会が何度かあり、英語で現地の人たちとコミュニケーションを取る楽しさを知り、もっと話せるようになりたいと思い、参加した。また、旅行が好きなので、この長期休みの機会に海外に行きたいなと思っていたのもあった。

今回の滞在で最も力が付いたのはリスニング力だと思う。学校の授業は勿論すべて英語であるし、ホームステイ先での会話もすべて英語だった。気づかぬうちにかなり聞き取れるようになっていた。その証拠に、初日は全く内容が分からなかった現地のテレビ番組の内容が、3 週間目にはかなり理解できるようになっていた。
その一方で、やはり 3 週間では限界があるなとも感じた。今後も英語学習を継続して、力をつけていくことが大切だと思っている。

英語学習のために訪れたシドニーであったが、街並みがとても美しく、自由時間もとても楽しかった。海沿いのダーリングハーバーやロックスの街並みは一生忘れられないほど美しい景色であった。街で出会う人たちや現地の学生もとても優しく、将来シドニーに住みたいなと本気で思った。

また、シドニーはとても寛容で快適な街であると感じた。今回は渡航前から COVID-19 が流行し、国によってはアジア人ヘイトが散見される地域もあった。渡航前はシドニーでもヘイトを受けるのかな？と少し不安であったが、全くそんなことはなかった。多民族国家であるシドニーには私が見る限り人種差別は存在せず、とても過ごしやすかった。

滞在中には大規模な LGBTQ パレード「Mardi Gras[2]」が行われていた。以前東京で行われた LGBTQ パレードに行ったことがあるが、規模が全然違った。土曜日の夜にシドニーの街中で行われるパレードには大勢の人たちが集まり、とても華やかなお祭りとなっていた。多くの人が「LOVE is LOVE」「End Homophobia」などのメッセージが書かれたプラカードを掲げていた。オーストラリアでは数年前に同性婚が認められた。笑顔でパレードを歩く人々の姿に心を打たれた。それと同時に、なぜ日本では同性婚が認められないのだろう、なぜ人権が守られていないのだろう、と憤りや悲しみを感じた。セクシャルマイノリティの問題に関しても、寛容さを感じた。日本も見習ってほしいと思う。

[2] マルディ・グラはフランス語で「肥沃な火曜日」の意で、謝肉祭の最終日に、派手なカーニバル（謝肉祭）を行うカトリック由来の年中行事。

異文化に触れて

匿名希望
農学部 3 回生

そもそも、私が本研修に参加した理由は 2 つあります。

（1）　自らの英語力を上げたいから

これまでの英語学習ではリスニングだけ、あるいはライティングだけ、と特化した能力を高める機会はありました。しかし、実際に英語を使うという視点では相手から情報を耳で聞いて文章でまとめたり、口頭で意見を述べたりとより複雑な能力が求められると考えます。そこで、実際にオーストラリアへ行くことで効果的に能力を鍛えられることを期待しました。

（2）　オーストラリアの自然を見たかったから

オーストラリアは日本より遥かに広大な土地を有しており、自然を保護する意識が高いです。自然科学系の学生として自然の美しさを知ることは自らの研究に良い影響があるだろうと考えました。

まず（1）の目的に関してはかなり良く達成できました。ホストマザーや UNSW の教員と英語で会話するのはもちろんのこと街中でも現地の方とコミュニケーションをとる機会が多くありました。そして、1 つ強調したいのはコミュニケーションは言語力に留まらないということです。難しい単語を知らなかったり、発音がわからなかったりしても別の方法で伝えることは十分可能であり、手振りや言葉の言い換えなど別の力が必要になります。また、文化によってコミュニケーションの取り方も異なります。初め、店員さんに”Hello”、”How are you doing?”と言われたときは驚いてどう返答すればいいか分かりませんでした。その後何回かの経験を経て慣れましたが異なる文化を持つ人と会話する際にはこのような小さな差異が文化の数だけあるのだということに気づくことができました。

（2）に関してもブルーマウンテンズツアーやさまざまな名所を訪れることで達成できたと思います。ビーチやハイキングなど様々な観光地に赴いたことで思いがけない発見もありました。ビーチでは平日から大人が遊び、私のホストマザーは毎週末パーティを楽しんでいました。もし、海外への研修に参加する方がいればぜひ余暇の時間にも着目してほしいです。その何気ない風景の中が日本と異なること、そして自分が今描いているライフプランは非常に狭い視野に基づいたものだと痛感しました。

本研修を経て、私は新たな文化に直接触れることができました。英語試験対策であれば日本国内でも十分に、はるかに安く済ませることができたと思います。ただ、それ以上に自分の中で人生の「選択肢」が増えたことが最も重要な成果であったと考えます。今後、他の感じ方・考え方を考慮することを意識したいと思います。